

士族の商法

三遊亭円朝

青空文庫

うへの 上野の戦争後 徳川様も瓦解に相成りましたので、士族さ
 ん方が皆夫々御商売をお始めなすつたが、お慣れなさらぬ
 から旨くは参りませぬ。御徒士町辺を通つて見るとお玄関
 の処へ毛氈を敷詰め、お土蔵から取出した色々のお手道具な
 ぞを並べ、御家人やお旗下衆が道具商をいたすと云ふので、
 黒人の道具商さんが掘出物を踏み倒にやつて参ります。「エ
 殿様今日は。土「イヤ、好い天気になつたの。「ハイ、エ
 、此水指は誠に結構ですな、夫から向うのお屏風、三幅対
 の探幽のお軸夫に此霰の釜は蘆屋でげせうな、夫から此
 長二郎のお茶碗——是は先達もちよいと拝見をいたしま

したが此この四品よしなでお幾いくらでげす。士「何どうもさう一いち時どきに纏まとめて
聴きかれると解わからぬね、此この三幅ぶくろ対たいの軸ちくは己おれの祖父そふが拜はい領りやうをした
ものぢやがね、釜かまや何なにかは皆みな己おれが買かつたんだ、併しかし貴き様さまの見み込こみ
どくくらゐもの何どの位いの価かがあるぢやらう、此この四品よしなで。「左さ様やうでげすな、四品よしな
で七なな円えん位いでは如何いかゞでげせう。士「ヤ、怪けしからぬことを云いふ、釜かま
ばかりでもお前まへ十五ご兩りやうで買かうたのだぜ。「併しか此この節せつは門かど並なみ道だ
具うぐ屋やさんが殖ふえまして、斯か様やうな品しなは誰だれも見み向むもしないやうになりま
したから、全まる然で値ねがないやうなもんでげす、何どうも酷ひどく下げ落らくをし
たもんで。士「成なる程ほどハ一さ左さ様やうかね、夫それぢや宅うちへ置おいても詰つまらぬか
ら持もつてつて呉くれ、序ついでに其そこ所こに大かきな瓶かめがあるぢやらう、誠じやまに邪じや魔ま
になつて往いかぬから夫それも一しよ緒もつに持もつて行ゆくが宜よい。などと無た代ゞ遣やつ

たり何かなにいたし誠にひんかくお品格よの好い事これでござりました。是わたくは円
 朝しが全くそ其じつちの实地きもを見て胆つづを潰なしたが、何なんとなく可をか笑味しみがあり
 ましたから一せき席まのお話まに纏まとめました。処ところが当たう今こんでは皆みな門もん弟てい等
 や、孫まご弟子でし共どもが面おも白しろをかしく種いろ々くに、色いろ取どりを附つけてお話を
 致いたしますから其その方ほうが却かへつて面おも白しろい事ことでござりますが、円わたくし朝まうしの申
 上あげまするのは唯たゞ实地じつちに見みました事ことを飾かざりなく、其その盤まお取とり次つぎ
 を致いたすだけの事ことでござります。小を川が町ま辺ちの去さる御お邸やしきの前まへを
 通つう行かうすると、御ご門もんの潜くゞり戸どへ西にしの内うちの貼はり札ふだが下さつてあつて、
 筆ふで太ぶとに「此この内うちに汗あせ粉こなあり」と認しためてあり、ヒラリとと風かぜで
 翻あほつて居をつたから、何なんぞ落はな語なしの種たね子ねにでもかなるであらうと存ぞんじま
 して、門な内かへ這はい入いつて見みましたが、一かう向しる汁こ粉こ店やらしい結か構くりがない、

げんくわんしやうめん
 玄関正面には鞞形ぎやがたの襖ふすまたてが建てありまして、欄間らんまには槍薙やりな
ぎなた 刀るゐの類かいつが掛をて居り、此方こなたには具足櫃ぐそくびつがあつたり、弓鉄砲杯ゆみてつぱうなど
たてかけ が立掛たてかけてあつて、最いとも嚴いめしき体裁ていさいで何所どこで喫たべさせるのか、
ながや お長家ながやか知ら、斯かう思おもひまして 玄関げんくわんへ掛かり「お頼たのまうしウ申まうす、
たのまうし え、お頼たのまうしウ申まうす。「ドーレ。と木綿もめんの袴はかまを着つけた御家来ごけらいが出て
き 来きましたたぐいまが当今ちがとは違ちがつて其頃そのころはまだお武家ぶけに豪えらい権けんがあつて
ちやうにんなど 町人ちやうにんなど杯がは眼がん下かに見み下おろしたもので「ア、何所どこから来きたい。「へ
ごもん い、え、あの、御門ごもんの処ところに、お汗粉しるこの看板かんばんがで出て居をりましたが、
ながや あれはお長家ながやであそそばしますのでげせうか。「ア、左様さやうかい、汁し
るこくひ 粉るこくひを喰きにき来たきのか、夫それは何どうも千せん萬ばん辱かたじけない事ことだ、サ遠慮ゑんりよせず
これ に是これから上あがれ、履物はきものは傍わきの方ほうへ片かた附つけて置け。「へい。「サ此こ

方つちへ上あれ。「御免下さいまして。……是これから案内あんないに従したがつて十
 二畳でぼかり許しよるんの書院しよるんらしい処ところへ通とほる、次つぎは八畳でふのやうで正しやうめん面めんの床とこ
 には探たんにゆう幽よこものの横物よこものが掛かり、古銅こどうの花くわびん瓶びんに花はなが挿さしてあり、
 煎茶せんちやの器械きかいから、蓑たぼこぼん盆ひぼちから火鉢ひぼちまで、何いづれも立派りつぱな物ものばか
 りがみ出て居あります。「ア、当家たうけでも此この頃ごろ斯かういふ営業えいげふを始はじめたの
 ぢや、殿様とのさまも退屈たいくつ凌しのぎ——といふ許ばかりでもなく遊あそんでも居あられ
 ぬから何なにがな商法しやうはふを、と云いふのでお始はじめになつたから、何どうか
 まア諸方しよほうへ吹聴ふいちやうして呉くんなよ。「へいへい。「貴様きさまは何なんの
 汁粉しるこを喫たべるんだ。「え、何所どこのお汁粉屋しるこやでも皆みなコウ札ふだがピラ／＼
 下さがつて居ありますが、エへ、彼あれがございませぬやうで。「ウム、下さげふ
 札だは今いま誂あつらへにやつてある、まだ出来できて来こんが蠟色ろういろにして金蔴きんまき絵ゑ

で文字もじを現あらはし、裏うら表おもてとも懸かけられるやうな工合ぐあひに、少し気取きどつ
 て注文ちゆうもんをしたもんぢやから、手間てまが取とれてまだ出来できぬが、御膳汁ごぜんじ
るこ粉いと云いふのが普通なみの汁粉しるこで、夫それから紅べにあん餡いと云いふのがあ
しろあん白なか餡ほんべにの中なかへ本ほんべに紅いを入いれた丈だけのものぢやが、口こうねつ熱つを冷さ却ますと
まうか申まうす事ことぢや、夫それに塩しほあん餡いと云いふのがある、是これも別べつに製せいすのでは
なみない、普通なみの汁粉しるこへ唯ただちよちよいと焼やき塩しほを入いれるだけの事
それだ、夫それから団子だんご、道明寺だうみやうじのおはぎなご杯はいがあるて。「へいへいく、夫それ
どうぞでは何卒どうぞソノ塩しほあん餡いと云いふのを頂ちやうだい戴だいしたいもので。「左様さやうか、
しばらひか暫しばらひかく控ひかへて居ゐさつしやい。奥おくでは殿様とのさまが手襷たすきがけ掛かけで、汗あせをダク
ながく流ながしながら餡あんごしら拵ごしらへか何なにかして居ゐらつしやり、奥様おくさまは鼻
まつしろの先まつしろを、真まつしろ白しろたまにしなしろたまながら白しろたま玉たまを丸まるめて居ゐるなどといふ。「工

御前、御前。殿「何ぢや。「エ、唯今町人が参りまして、
 塩餡を呉れへと申ますが如何仕りませう。殿「呉れるといふな
 らやるが宜い。暫くするとお姫様が、蒔絵のお吸物膳にお吸
 ひものわんの物を載せ、すーツと小笠原流の目八分に持て出て来ました。
 「是は何うもお姫様恐入ます、へい〜有難う存じます。
 姫「アノ町人、お前代を喫べるか。「へい〜有難う存じ
 ます、何卒頂戴致したいもので。姫「少々控へて居や。
 「へい。慌て、一杯搔込み、何分窮屈で堪らぬから泡を食つ
 て飛出したが、余り取急いなので、菘入を置忘れしました。
 すると続いてお姫様が玄関まで追掛て参られて、円朝
 を喚留たが何うも凜々しくツて、何となく身体が縮み上り、私

は縛しぼれでもするかと思おもひました。姫「コレまへく町ちやうにん人待まちや
 \。」「へい、何か御用ごようで。姫「これはお前まへの苳たばこ入いれだらう。
 「へい、是これは何なうも有あり難がたう存ぞんじます。姫「誠まことに粗忽そこつだノ、已後いご
 氣きを附つきや。」「へい恐おそれ入いりました。どつちがお客きやくだか訳わけが分わかりま
 せぬ。是これから始はじまつたのでげせう、ごぜん汁粉じることいふのは。

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

士族の商法

三遊亭円朝

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>